▶明治～昭和にかけて作られた絣について解説する永田さん。

絣の今、そして未来へ

伝統工芸である広瀬絣の魅力に触れてもらおうと、８月４日に「広瀬絣講演会」が広瀬中央交流センターで行われました。

広瀬絣伝習所の永田佳子所長が講師を務め、かつて広瀬の町は機織りが盛んであった話や原材料となる木綿や藍の歴史の話などを解説。木綿と藍は相性が良く、染め重ねるごとに木綿の繊維が強くなることなど絣の特徴を説明していました。

参加した糸原裕子さんは「広瀬絣の良さを改めて感じることができました」と話していました。

▶聖火を一つにまとめる参加者の皆さん。

共生社会の願いを込めた聖火

東京2020パラリンピックの気運を高めようと８月15日に「東京2020パラリンピック聖火フェスティバル」を安来節演芸館で行いました。当日は、8月12日に市内３つの障がい者支援施設（梨の木園、ぎば工房ひろせ、チューリップの里）で行った火おこしイベントで採火した火と日立金属安来工場で金属加工に使う炉の火を集火。その後、火は島根県で一つにまとめられ、東京都へ送られました。

火おこしイベントでは、「まいぎり式火おこし器（摩擦を利用して火をおこす木製の道具）」を使って火をおこしました。

たうんとぴっくす

まちの話題や出来事を紹介します

今月の一枚

コロナ禍で全国の花火業界も影響を受けています。日本伝統の花火を守るため、そして尽力する医療従事者に感謝の気持ちを伝えるために750発の花火が夏の夜空を彩りました。 ８月22日：広瀬町布部

仕事と生活の調和　市長日記

職員のワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）を考え、自らもその充実に努める「イクボス」となることを宣言しました。

イクボスとは「部下のワーク・ライフ・バランスを考え、その人のキャリアと人生を応援しながら、組織の成果を出しつつ、自らも仕事と生活を楽しむことができる上司」のこと。この宣言により先頭に立って推進します。

◀記者会見でイクボスを宣言する田中市長。（８月25日）

このマークの記事は、関連写真を「市公式フェイスブック」で公開しています。

▶透視度計を使って、中海の透明度を観察する児童たち。

五感を使って、環境学習

自然豊かな中海の大切さを知り、その自然を守る心をはぐくんでもらおうと８月22日、島田交流センターで環境学習が行われました。

スタートは交流センター近くの中海での水質調査。集まった児童10人は水の透明度や流れついたゴミがないか見たり、臭いを嗅いだり、音を聞いたりするなど、それぞれが五感で感じた事をチェックシートに記入し、水辺の環境を評価しました。

川口哲平さんは「ポイ捨てや食べ残しなどをしないようにしていきたい」と話していました。

住みやすい広瀬にするために

広瀬庁舎と広瀬中央交流センターの機能を再編した新たな施設のあり方を検討しようと「広瀬地域のまちづくりを考える市民ワークショップ」を８月29日に広瀬中央交流センターで開催しました。

当日は、広瀬地域に住む中学生から70歳代まで31人が参加。年代別のグループに分かれて、まちに必要な施設などの意見を出し合いました。話し合いの中では、「勉強スペースを備え、本も充実した図書館があると良い」「人とのつながりが持てる施設にしたい」といった意見が出されていました。

◀グループごとに活発な話し合いがされていました。

入館者50万人を記念して

安来の鉄文化に関する展示を行う和鋼博物館の入館者が50万人を達成したことを受けて、８月３日に同館で記念セレモニーを開催しました。

50万人目の入館者となったのは市内在住の大屋歩美さんと佑玖（たすく）くん（10歳）、壱心（いっしん）くん（６歳）親子。３人には記念証と記念品、花束が贈られました。

佑玖くんは「夏休みの自由研究のために来ました。記念セレモニーに出るのは初めてだったので驚いたけど、良い思い出になりました」と話していました。

同館は平成５年にオープンし、観光地や子どもたちの学習の場として親しまれています。

▶田中市長から記念品などを受け取る大屋さん親子。

◀等級に分けた後、箱詰めをして出荷されます。

秋の味覚、次々と出荷

県内一の生産量を誇る二十世紀梨の出荷が８月23日から始まり、ＪＡしまねやすぎ地区本部安来果実選果場には、次々と収穫された梨が運び込まれました。今年は、台風の影響で落果などの被害がありましたが、糖度は例年よりも高く、玉も大ぶりの仕上がり。梨の特徴である食感をしっかりと楽しむことができます。

同選果場では、運ばれた梨の選別や箱詰めなどを行い、市内の直売所や県内だけでなく、広島県、山口県などへも出荷。40トンの出荷量を目標としています。